

曹洞宗『布薩講式』の変遷：貞享本の紹介を中心として

著者	尾? 正善
雑誌名	鶴見大学佛教文化研究所紀要
号	19
ページ	127-163
発行年	2014-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000010



曹洞宗『布薩講式』の変遷

— 貞享本の紹介を中心として —

鶴見大学仏教文化研究所員 尾崎 正善

一、はじめに

布薩とは、インドにおいてもと齋日に法を説く儀式であったものが、後に新月と満月の月に二回、修行僧が集まって戒条を読み上げ、それまでの間に過ちを犯さなかったか確認するものへとなった。中国・日本においては、梵網戒等の大乘戒を中心として儀礼が行われ、後世では祈祷的要素が深まり、曹洞宗では独自の回向文が付されるようになってきた。

因みに、活字化された布薩儀礼関係の資料を列記すると、道宣撰『四分律行事鈔』上四「説戒正儀篇十」（『大正藏』第四〇巻、頁三四中段）、明曠刪補『天台菩薩戒疏』卷下（『唐大曆一二年』）（『大正藏』第四〇巻、頁五九七上段）がある。

曹洞宗における現行の布薩は、この道宣・明曠の「布薩式」が基本となっている。

さらに、日本においては、活字化され刊行されているものだけでも、良忍撰『略布薩次第』（五本）（『良忍上人の研究』融通念仏宗教学研究所・昭和五六年）、慈円真筆・曼殊院藏本『布薩次第』（『龍谷大学仏教学研究』第三七号・昭和五六年）、法然撰『浄土布薩式』（『法然上人全集』明治三九年）〔真偽未詳〕、慈雲尊者撰『広布薩式』（『慈雲尊者全集』卷六）、『布薩法則』（『浄土宗法要儀式大鑑』昭和八年）等、多くの布薩式が伝えられてお

り、さらに、各宗派・各寺院の写本を加えると各時代・各宗毎に多様な布薩が存在すると考えられる。

さて、その布薩の特徴に付いて、曹洞宗ではどのような形態、どのような変遷を経ているのか、初期の段階からの変化に関連して以前論じたことがある。⁽¹⁾

その際には、中国禅宗及び日本臨済宗で行われていた布薩、そして『瑩山清規』に記される布薩と面山瑞方（一六八三〜一七六九）が宝暦四年（一七五四）に編集・開板した『洞上大布薩法』（『続曹全』「清規・講式」）を比較検討した。

今回、面山編集本以前の布薩を記した、貞享本『曹洞四講式』の写本を入手することができた。

さらに、以前取り上げなかった『大布薩式』明和四年（一七六七）の刊本が、面山以前の古い系統であることが判明した。そこで、それら諸本を比較するため改めて資料を提示し、その特徴と変遷過程を論じることとした。

一、曹洞宗関係布薩一覽

現在、一般に目にすることの出来る布薩は、曹洞宗宗務庁が昭和四一年に刊行した折本と、『続曹全』「清規・講式」に掲載された面山瑞方撰の二本である。

しかし、先に述べたように『瑩山清規』を始めとして、幾つかの宗門布薩儀礼が確認できる。貞享三年の写本は、今まで知られることの無かった『曹洞四講式』中の「布薩式」である。

次に、先の論文とも一部重複するが、曹洞宗関係布薩一覽を示す。

〔曹洞宗布薩資料〕

① 梵清本系『瑩山清規』― 愚休本・麟広本・光椿本

② 『正法清規』永正六年（一五〇九）写本

- ③ 月舟本『瑩山清規』延宝五年（一六七七）刊本（月舟本と略す）
- ④ 流布本『瑩山清規』延宝九年（一六八一）刊本（流布本と略す）
- ⑤ 貞享本『曹洞四講式』貞享三年（一六八六）写本（貞享本と略す）
- ⑥ 龍泰寺蔵『菩薩戒布薩式』寛保三年（一七四三）写本（龍泰寺本と略す）駒図H292W/50
- ⑦ 『大布薩式』明和四年（一七六七）刊本（明和本と略す）駒図H292/64-5
- ⑧ 面山撰『洞上大布薩法』宝暦四年（一七五四）刊本（面山本と略す）『統曹全』「清規・講式」
- ⑨ 『菩薩戒大布薩式』昭和四一年（一九六六）宗務庁刊（宗務庁本と略す）

二、各本の書誌

次に各本の簡単な書誌を記しておきたい。

① 梵清本系『瑩山清規』— 愚休本・麟広本・光椿本

この三本は、共に梵清本系と呼ばれる太容梵清（?）（一四二七）の改編後の諸本で、大乗寺蔵の愚休書写本は文明八年（一四七六）書写、永光寺蔵の麟広書写本は明応十年（一五〇一）書写、永光寺蔵の光椿書写本は文亀三年（一五〇三）書写である。

② 『正法清規』
詳細な書誌と相互の関係については、拙論を参照いただきたいが、^②布薩の内容に関しては大きな差異は認められない。

この本は、岩手正法寺に所蔵されるもので、永正六年（一五〇九）の書写である。

『正法清規』は、峨山紹碩の弟子無底良韶（一三三三〜一三六一）が貞和四年（一三四八）に開いた正法寺に伝わるものである。永正六年の写本であるが、旧本『瑩山清規』の形態を伝承している清規として古くから注目されている。

③月舟本

この本は、月舟宗胡（一六一八〜九六）が、大乘寺において、延宝五年（一六七七）に刊行したもので、愚休本を底本としている。その特徴として、「月舟本」は積極的に異本からの採用を行っている点がある。次の「流布本」と比較しても「月舟本」のみが異本と合致する箇所が散見され、月舟が「愚休本」を底本として開版し、その異本箇所も含めて忠実に翻刻したことが確認できる。

④流布本

卍山道白（一六三六〜一七一五）が、師である月舟の開版四年後に刊行したものである。『瑩山清規』の中では、最も流布した版本で、後世への影響も大きい。但し、卍山の手が大きく入った可能性があり、初期の諸本と比較すると多くの異同が確認できる。今回論じる「布薩式」においてもそれは明らかである。

⑤貞享本

次に、今回新たに入手した、講式の紹介を行いたい。

法量 縦二十七センチ 横二十センチ

丁数 三十八丁

表題 表紙直書「布薩式」（その下に「禪」と記される）

題笈の切れ端が挟まれ、そこに「禪宗諸講式」とある。

講式名 菩薩戒布薩之儀規

奥書 貞享丙寅之冬梅岑首座寄紙而乞騰於

四講式予荷河潤恩故不願筆力拙塞白

應命矣 加陽金城護国山裡觀海拜手

印 印

まず、構成は、奥書に「四講式」と記されるように「菩薩戒布薩式・圓覺大師講式・佛涅槃講式・應眞供養式（羅漢講式）」の四講式である。

その内、一丁目は「如来唄」の下書きで、中央に「布薩式」と書かれており、直接本書の構成とは関係がない、中表紙のように使用されている。二丁目より「菩薩戒布薩式」の照牌・露地之圖が二丁あり、四丁目が白紙、五丁目の一行目に「菩薩戒布薩之儀規」とあり、ここからの十一丁が「菩薩戒布薩式」である。

さらに、「圓覺大師講式」が二丁ある。この講式の分量が少ないのは、「祭文・惣札」以外はその項目名を挙げるのみだからである。

続いて、「佛涅槃講式」十一丁、最後に「應眞供養式（羅漢講式）」が九丁、そして奥書と、全部で三十八丁である。

先に挙げた奥書を見ると、本書は貞享丙寅三年（一六八六）の冬、梅岑首座が紙を寄せて四講式の謄写を乞うたので、私（観海）は、河を担う恩に潤うがために、筆力の拙なるを願（顧みずか？）わず、白き紙を埋め、命に応じた、というのである。この観海は、加賀の国、金沢護国山宝円寺の僧である。

これにより、貞享三年（一六八六）に書写された事が確認され、後に述べる面山本より約七十年前の布薩であったことが分かる。さらに、諸本の特徴を論じる段階でも詳説するが、『聲山清規』諸本の「布薩式」に確認できない、「回向文」の初出資料なのである。

因みに、宝円寺は、前田利家が天正九年（一五八一）、能登国所口（石川県七尾市）に移った時、大透圭徐（一五二五〜九八）を越前から招き建立した寺である。さらに、同一年（一五八三）、利家が金沢城主となると再び大透を能登の地から金沢へ招き、現在の護国山宝円寺を建立したとされる。後、前田利家の葬儀もこの寺で行われ、前田家代々の菩提寺となった。

また、常恒会地であり多くの修行僧が参集していたことが想像される。但し、法幢許可の年は、元禄六年（一六九三）八月二十三日であるので、本布薩が書写された時点では認可はされていないかった。

いづれにせよ江戸期の金沢における拠点寺院の一つとして隆盛を極め、修行僧も多数参集していたので、布薩が行じられるようになったと考えられる。

⑥ 龍泰寺本

龍泰寺所蔵『菩薩戒布薩式』の写本である。

この奥書には、

時寛保三年癸亥夏安居六月

五日祥雲山龍泰禪寺什與

維那用焉 印

とあり、寛保三年（一七四三）の時点で龍泰寺の什物であったことが分かる。

その内容は、次に挙げる『大布薩式』と同一であり、その版本の成立が、面山本よりも古い段階であったことが確認できる貴重な資料である。

⑦ 明和本

この本は、『重正五講式』『涅槃講式・達磨大師講式・羅漢供養式・歎仏會法式・菩薩戒布薩式』五巻の一冊として刊行された。「涅槃講式」の冒頭に「重鋏五講式引」という序文がある。その最後に、

時明和四年歲次丁亥夏安居日

加金城護国叟

和南書 印 印

と記されている。これにより、明和四年（一七六七）に重刻されたことがわかる。それ以前の版がいつ頃作成されたか判然としない。刊行の年代を比較すると、面山本よりも時代は降るのであるが、先に記した「龍泰寺本」と校合を行つたところ同一のものであることが確認できた。それにより、その成立は次に挙げる面山本よりも古い成立であることが明らかになった。また、貞享本と同じ金沢護国山宝円寺の系統であり、その関係の深さが考えられる。

さらに、大正六年（一九一七）にも再刊されており、こういした一連の経緯から考えて、面山本よりも広く流布していたと思われる。

⑧面山本

この本の書誌に関しては、『曹全』『解題・索引』に詳しいので、その概略だけ触れておく。

本書は、面山瑞方（一六八三—一七六九）が宝暦三年（一七五三）に序文を撰し、翌四年に刊行したもので、その序文には、道元禪師より五百年にわたって伝えられてきたものが、展転贍写し、差脱一ならざる故に、諸本を参照し、誤りを正して再刻した、と記されている。

また、『洞上僧堂清規行法鈔』巻五「別行法式十八條大綱」に「大布薩式」に関する簡単なコメントを付しているが、そこにおいても「印板ノ本差誤ヲヲシ」と批判している。

この批判の対象が、「明和本」の底本と考えられる。

⑨宗務庁本

宗務庁が、『昭和改訂声明規範』『歎仏会法式・羅漢講式・大布薩式・観音懺法・付録』の一冊として昭和四十一年二月十五日に発行し、昭和五十六年三月一日に第三版が出されている。

凡例によると、編集の段階で幾つかの変更点、時間の短縮、仮名表記の変更、ルビの整備等を図った様であるが、参照した本は、「古規本」と「流布本」であるとしている。この「古規本」というのが「面山本」で、「流布本」が

「明和本」であろう。本書を刊行した時点では、その前後関係が明らかでなかったと思われる。因みに「明和本」は、先に述べたように大正時代にも再版され、宗門に広く流布していた事実があった。これに対して「面山本」を「古規本」と表記しているのは、その古いという点のみでなく、流布が限定的であったことも示していると思われる。この「明和本」と「面山本」の両本を参照して、現行の布薩式が定められているので、今回その比較の為にここに改めて紹介することとした。

四、各本の相互関係と特徴

以上九本の資料を挙げたが、その特徴と貞享本を含めた相互の関係を述べておく。

A、『瑩山清規』関係の諸本

まず、梵清本系の内、愚休本と光椿本は同一である。さらに、「月舟本」も愚休本系であるので、差違は殆ど確認できない。

「麟広本」に関しては、差違が数カ所確認できる。例えば「照牌」中の「食後」が「齋罷」となり、また「散華偈」「焼香偈」「後唄」の前後の進退の記述に異なる点が認められる。しかし、全体を通覧し比較したとき、その問題点は少ないと言える。

『正法清規』は、偈文と敬白文のみであり、該当箇所比較すると一行の写脱と四箇所脱字、同文の重複等が確認できる。

これら諸本は、全体の構成に大きな差異は認められず、梵清改編段階の古い形式を踏襲していると言える。

なお、禅林寺本『瑩山清規』には布薩が記されていないので、その成立初期の段階で無かったものが、『正法清規』では偈文と敬白文が、梵清本では進退・作法まで含んだ差定が挿入されという、段階的な挿入・増補があったの

ではないかと想定される。

最後に「流布本」であるが、これには卍山の改編があり、「月舟本」と比較すると、四十ヶ所以上の加筆・訂正が確認できる。中でも、「如来唄」の挿入が大きな問題となる。この「如来唄」は、流布本にのみ確認出来ることから、卍山が挿入したと考えられる。それまでの諸本は、散華偈に続いて

是毘舍那誦。我亦如是誦。汝^ラ新學菩薩、頂戴受持戒。

とあり、続いて「焼香偈」を記すのみである。

これが「流布本」では、

偈畢鳴槌一下、梵音人唱唄

如来 妙色 身世

唄畢焼香人焼香。維那鳴槌一下。唱云。

とあり、この後に「焼香偈」が続く。

まず、「是毘舍那誦」とあるのは、『慈雲尊者全集』巻六「布薩式畧軌」に、「歸命毘舍那、十方金剛佛」とあるのと同様の趣旨であろうか。無論、慈雲尊者（一七一八〜一八〇五）は、江戸後期の真言宗の僧侶であるので出典にはならないが、こうした構成の布薩がそれ以前の古い段階で存在していたことが想定される。

では、卍山は、何に基づいて挿入したのであるか。直接の出典を断定することは出来ないが、良忍撰『略布薩次第』の中には、「如来妙色身、世間無與等、無比不思議、是故今敬礼、如来色無盡、智恵亦復然、一切法常住、是故我歸依」と、「如来唄文」を唱えている。無論、この句自体は、『大宝積経』が出典であるが、日本天台の多くの儀礼で唱えられていたようである。こうした、先例を参照して「如来唄」を布薩中に挿入したのであるか。（『良忍上人の研究』一三頁、融通念仏宗教学研究社・昭和五六年）

また、現在の「羅漢講式」においても「如来妙色身世」と唱えられるが、これは「麟広本」にも確認できる。つまり、「如来唄」は、羅漢講式で古くから行われていたが、それを「布薩会」にも挿入した、と言うことであろうか。いずれにせよ、出山の改編を示す、顕著な例であると同時に、その後の宗門の布薩式に与えた影響は大きい。

B、回向文

『磐山清規』系の「布薩」に対して江戸期以降の諸本との決定的な相違点は、回向文の挿入と声明符の記載である。曾て「面山本」を見たとき、回向文の存在に興味を持ち、その出典を探したことがあった。

例えば、宗門以前の資料、道宣『四分律行事鈔』上四『説戒正儀篇十』には、「啓白文」「回向文」はない。

日本においては、融通念仏の祖、良忍上人（一〇七三〜一一三二）の残した記録に、「啓白文」はあり、「回向偈」もあるが、それは「向來說戒、無量勝因、廻恵六道、和南清衆」という簡単な偈文である。因みにこの「回向偈」は、慈円（一一五五〜一二二五）真筆曼殊院藏本『布薩次第』、実導仁空（一二〇九〜一三八八）撰『新学行要鈔』「説戒法第五」（延文元年（一二三六）撰）（『大正藏』第七四卷、頁七八一中段）などに引かれる。

このように先行する資料に長文の「回向文」は見られないのであるが、今回の発見の「貞享本」により、少なくとも江戸の初期の段階で宗門の布薩に「回向文」が付され、より祈禱的な位置づけが強まっていたことが確認できた。さらに「明和本」も「面山本」よりも古いことが判明したので、その出典をこの「明和本」に求めることは可能であろう。詳細な相違点は、資料を通して確認していただきたいが、面山が「明和本」を参照したことは歴然であろう。また細かな出入は確認できるが、「明和本」が「貞享本」を参照したであろうことも充分想定される。

ここで三本の比較を行うことにより、その変遷の過程が明らかになるであろう。

C、声明符

編集の都合上、翻刻は行わなかったが、「貞享本」以降の諸本には声明符が付される。「貞享本」においてはその一

部に限定され、さらにその形式も微細な傍注の様であるが、「明和本」・「面山本」になると明確に付されている。

こうした声明符の比較により、宗門における声明の形式及びその変遷の過程も明らかになると思われる。

D、進退・配役名称の相違

『瑩山清規』系統のものと、後の各本では大きな相違が見られる。こうした進退の相違も時代・地域差を考慮する基礎資料となろう。

また、配役名に関しては、『瑩山清規』系・貞享本・「明和本」が、「維那」とするものを「面山本」では「唱白」としている。さらに、「和尚」「主人」「戒師」等の配役名に関してもそれぞれ相違が見られる。

E、還籌偈の挿入と偈の名称の相違

この還籌偈は「面山本」から挿入された物で、それ以前の諸本に確認できない。ただし、これは先行する道宣撰『四分律行事鈔』の布薩資料に基づく挿入である。

さらに、「明和本」と「面山本」を比較すると、「露地偈」を「聞鐘偈」、「作禮偈」を「布薩偈」と改めている。

こうした変更の多くが、「宗務庁本」に継承されている。

F、焼香偈の位置

「面山本は、「焼香偈」が「如来唄」の前に移動される。この移動の意図に関しては、判然としない。因みにこの位置は、「宗務庁本」にも継承されている。

おわりに

以上、各本の相違点と変遷の過程を中心として、宗門布薩会の問題点を列記した。

この中でも特に問題となるのは、「回向文」であろう。なぜ、布薩という僧団内の、言わば反省会とも言うべき法

要に、長文の回向が必要なのであろうか。

その回向の内容・対象は、見て明らかのように、諸仏諸菩薩、大小神祇、今上天皇、施主、檀信徒、歴代祖師等々に到るまで、ありとあらゆるものである。

このような考え方が、他宗でもあるのであろうか。管見の限り、確認することはできていない。こうした布薩会の考え方は、宗門独自のものでなからうか。

こうした傾向が明らかになるのは、江戸初期、今回紹介した「貞享本」が現時点では最初なのである。それ以前にもこうした傾向が有ったとも考えられるが、その問題に関しては、今後の課題としたい。

いずれにせよ、こうした宗門布薩会の特徴を明らかにするためにも、多くの資料の発見が期待されるところである。

【注】

(1) 拙著「曹洞宗における「布薩」について」『印度学仏教学研究』第四八巻第一号、平成十一年（一九九九）一二月。

(2) 拙著「『磐山清規』の変遷について（一）―諸本の系統に関する覚書―」『曹洞宗宗学研究所紀要』第六号、平成五年（一九九三年）。

*その他、布薩座位・差定に関しては、以下の資料にも確認できる。

『永平小清規』 「行布薩座位図」 （『曹全』 「清規」 三三六頁）

『永平小清規翼』 「略布薩式」 （『曹全』 「清規」 四二七頁）

『梶樹林清規』 「略布薩堂莊嚴図」 （『曹全』 「清規」 四四五頁）

『梶樹林清規』 「布薩堂之座位」 （『曹全』 「清規」 四八八頁）

『万松山清規』 「半月略布薩」 （『曹全』 「清規」 六一一頁）

『江湖指南記』 「大布薩座位」 （『統曹全』 「清規・講式」 三九五頁）

『侍者寮指南記』 「布薩排被位」 （『統曹全』 「清規・講式」 四一九頁）

『鞆菴清規』 「四月十五日の項」 （駒図162-28）

凡例

- 一、曹洞宗の布薩関係資料四本の翻刻である。
- 一、一段目は、『磴山清規』関係の資料で、「愚休本」である。「愚休本」を選んだ理由は、梵清本系ではもともと初期（文明八年・一四七六）の写本である点、送り仮名・ルビが諸本の中で最も詳細である点、月舟本の底本となったように後世の影響も確認できる点、「流布本」である出山刊行本は、容易に参照可能であること、等である。因みに、「麟広本」には、ルビ・送り仮名・返り点は一切付されていない。
- 一、二段目は、今回発見の「貞享本」である。なお、「回向文」の送り仮名・返り点は、全て朱書きであり、後世の加筆の可能性も考えられる。
- 一、三段目は、「明和本」で、駒澤大学所蔵本を底本とした。繰り返しになるが、「龍泰寺本」は同一のものである。
- 一、四段目は、「面山本」で、これまでの諸本の中では、構成が最も異なるものである。『続曹全』『清規・禅戒』に掲載されるものを底本とした。（ ）は、『続曹全』の頁数である。
- 一、「宗務庁本」は取り扱わなかった。
- 一、翻刻にあたって項目の改行箇所・空白、さらに、頁分け・改行箇所等に関しては、随意変更した。
- 一、漢字表記は、原本に準じたが、一部、俗字・異体字・略字に関しては、部分的に字体を常用漢字・当用漢字に改めた。
 - 無—无・徳—惠・界—訶・歸—皈等
- 一、声明符は、全て省略した。また、「偈」のルビに関しても、声明符との関係もあり、一部省略した。但し、「愚休本」については、声明符が無いので、ルビを参考の為に記した。

- 一、Aは照牌、Bは道場図（露地図）で、対照表ではその位置のみを示し、具体的な図は後半にまとめた。
- 一、①②までの番号は、その内容毎の区切りを、便宜的に示したものである。面山本を基準としたため、「還壽偈」「焼香偈」の箇所に移動がある。
- 一、「貞享本」の（ ）で示したのが丁数である。（3a）は、「布薩式」冒頭からの通し番号、a bは表裏を示す。先の解説では（五丁表）という表記を用いたが、翻刻の箇所では、（5a）に該当する。それ以外の諸本に関して、丁数を省略した。
- 一、へゝは、割注部分を示す。

東邊ニ立マ、見テ維那ノ展ニルヲ拜席マ、侍者參テ合掌シテ露地ノ偈ヲ唱フ。衆和ス。
 主人迎ニ。此ノ時行者収テ鼓聲一即チ鳴ニ大鐘一。如法纒聲也。主人當面問訊燒香、大展三拜了テ、首座ノ上肩ニ問訊ノ卓立。此ノ時、大衆普同問訊スレハ、維那合掌、誦ニ露地ノ偈一。大鐘即チ罷。大衆普同合掌、誦ス偈。

②
 降伏魔力怨 除結盡無餘 露地擊健椎
 比丘聞當集 諸欲聞法人 度流生死海
 聞此妙響音 盡當雲集此
 偈畢マ、維那打テ聲、引レ衆ヲ入室ノ、依テ座位ノ前ニ立定、展ニ坐具マ、大同三拜ノ上ニ胡跪合掌、説テ偈。

②
 降伏魔力怨 (和) 除結盡無餘 露地擊健椎
 比丘聞當集 諸欲聞法人 度流生死海
 聞此妙響音 盡當雲集此
 偈了テ維那手聲ヲ鳴ノ、衆ヲ引テ入室ス。殿ノ西邊ヨリ一匝シテ、次第二位ニ就テ定立シ一齊ニ展具三拜、胡跪合掌ス。維那大磬ヲ鳴ス。一下ノ偈ヲ唱。衆和ス。

主人ヲ出シト。二侍者先ニ行、維那後ニ行。此時行者収テ鼓聲一即チ鳴ニ小鐘一七下ス。主人隨テ維那ノ後ニ而赴テ道場。二侍者携テ拂子香合、隨主人後行。主人到堂前燒香象爐ニ、到リ正面ニ燒香三拜ノ而出ニ露地一。倚テ首座ノ上肩ニ卓立。維那打テ手聲、普同問訊ス。謂ル先ツ向テ左三揖、次ニ向テ右三揖、次ニ向當面三揖ス。此ノ時維那合掌ノ挙ニ露地偈ヲ。

②
 間鐘偈
 大衆、從ニ除結和レ之ヲ
 降伏魔力怨 除結盡無餘
 露地擊健椎 比丘聞當集
 諸欲聞法人 度流生死海 (頁八〇七)
 聞此妙響音 盡當雲集此
 偈了リ相シ掛唱白鳴シ手聲ヲ、引レ衆ヲ入室ス。從リ前門ノ西類ノ入マ、一匝ノ北東マ、各依テ圖位ニ展具三拜、胡跪ノ具上ニ合掌ス。唱白挙ニ布薩ノ偈。

曹洞宗『布薩講式』の変遷一貞享本の紹介を中心として一

<p>③ 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈畢テ、収テ坐具ヲ起ツ。先ツ主人著座、次ニ首座大衆揖ノ問訊、跣坐ス。維那及ヒ法事僧、共ニ五人ハ者、不著座セ。用僧四人ハ者、置テ坐具ヲ安レ位ニ。維那引テ用僧ヲ、進テ正<small>面ニ如レ</small>圖ノ立定ス。維那先ツ問訊、抽身ノ歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ、問訊長跪合掌ノ唱テ淨水ノ偈ニ云。</p>	<p>④ 八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染 執持禁戒無闕犯 一切衆生亦如是</p> <p>偈畢テ、右手ニ取テ淨水瓶ヲ、受テ左ノ掌ニ、兩手ニ灌洗シ、而右手ニ取テ手中ヲ拭レ畢テ、右手挫レ机<small>而起立</small>問訊。此ノ時燒香ノ人同ク問訊。如シテ先ニ進ニ淨水ノ前ニ、維那徐<small>ヤカ</small>横歩ク、進テ香湯ノ前ニ兩人同ク問訊長跪、維那先ツ唱テ香湯ノ偈ヲ云。</p>	<p>③ 持戒清淨如滿月 (和) 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了テ、淨水ヲ受ケ灌洗ノ立ツ。淨水ノ前ニ、兩手ニ灌洗シ、而右手ニ取テ手中ヲ拭レ畢テ、右手挫レ机ノ香湯瓶ノ前ニ至テ、淨水ノ人同ク問訊ノ、胡跪合掌。維那先ツ偈ヲ唱。偈云。(二才)</p>	<p>④ 八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染 執持禁戒無闕犯 一切衆生亦如是</p> <p>八功徳者、清冷輕美香飲食時調適其心飲ニ患不臭</p> <p>八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染</p> <p>淨水ノ偈</p>	<p>③ 作禮ノ偈 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了マテ、三拜 主人大衆 収テ坐具ヲ相揖ノ跣坐ス。唯、維那及ヒ淨水香湯兩手中五人ハ、不著座。維那引テ淨水等ノ四人マ、進ニ正<small>面ニ如レ</small>圖ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>
<p>③ 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了マテ、三拜 主人大衆 収テ坐具ヲ相揖ノ跣坐ス。唯、維那及ヒ淨水香湯兩手中五人ハ、不著座。維那引テ淨水等ノ四人マ、進ニ正<small>面ニ如レ</small>圖ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>	<p>④ 八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染 執持禁戒無闕犯 一切衆生亦如是</p> <p>八功徳者、清冷輕美香飲食時調適其心飲ニ患不臭</p> <p>八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染</p> <p>淨水ノ偈</p>	<p>③ 作禮ノ偈 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了マテ、三拜 主人大衆 収テ坐具ヲ相揖ノ跣坐ス。唯、維那及ヒ淨水香湯兩手中五人ハ、不著座。維那引テ淨水等ノ四人マ、進ニ正<small>面ニ如レ</small>圖ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>	<p>④ 八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染 執持禁戒無闕犯 一切衆生亦如是</p> <p>八功徳者、清冷輕美香飲食時調適其心飲ニ患不臭</p> <p>八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染</p> <p>淨水ノ偈</p>	<p>③ 布薩偈 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了テ各ニ三拜。収具ノ踏坐ス。但シ唱白ハ直ニ引テ淨水香湯兩手中四人マ、進前ノ立定ス。時ニ唱白一人、問訊シ抽身ノ、歴<small>後テ</small>淨水ノ後マ、進前ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>
<p>③ 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了マテ、三拜 主人大衆 収テ坐具ヲ相揖ノ跣坐ス。唯、維那及ヒ淨水香湯兩手中五人ハ、不著座。維那引テ淨水等ノ四人マ、進ニ正<small>面ニ如レ</small>圖ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>	<p>④ 八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染 執持禁戒無闕犯 一切衆生亦如是</p> <p>八功徳者、清冷輕美香飲食時調適其心飲ニ患不臭</p> <p>八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染</p> <p>淨水ノ偈</p>	<p>③ 作禮ノ偈 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了マテ、三拜 主人大衆 収テ坐具ヲ相揖ノ跣坐ス。唯、維那及ヒ淨水香湯兩手中五人ハ、不著座。維那引テ淨水等ノ四人マ、進ニ正<small>面ニ如レ</small>圖ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>	<p>④ 八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染 執持禁戒無闕犯 一切衆生亦如是</p> <p>八功徳者、清冷輕美香飲食時調適其心飲ニ患不臭</p> <p>八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染</p> <p>淨水ノ偈</p>	<p>③ 布薩偈 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了テ各ニ三拜。収具ノ踏坐ス。但シ唱白ハ直ニ引テ淨水香湯兩手中四人マ、進前ノ立定ス。時ニ唱白一人、問訊シ抽身ノ、歴<small>後テ</small>淨水ノ後マ、進前ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>
<p>③ 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了マテ、三拜 主人大衆 収テ坐具ヲ相揖ノ跣坐ス。唯、維那及ヒ淨水香湯兩手中五人ハ、不著座。維那引テ淨水等ノ四人マ、進ニ正<small>面ニ如レ</small>圖ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>	<p>④ 八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染 執持禁戒無闕犯 一切衆生亦如是</p> <p>八功徳者、清冷輕美香飲食時調適其心飲ニ患不臭</p> <p>八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染</p> <p>淨水ノ偈</p>	<p>③ 作禮ノ偈 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了マテ、三拜 主人大衆 収テ坐具ヲ相揖ノ跣坐ス。唯、維那及ヒ淨水香湯兩手中五人ハ、不著座。維那引テ淨水等ノ四人マ、進ニ正<small>面ニ如レ</small>圖ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>	<p>④ 八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染 執持禁戒無闕犯 一切衆生亦如是</p> <p>八功徳者、清冷輕美香飲食時調適其心飲ニ患不臭</p> <p>八功德水淨諸塵 灌掌去垢心無染</p> <p>淨水ノ偈</p>	<p>③ 布薩偈 持戒清淨如滿月 身口皎潔無礙穢 大衆和合無違諍 爾乃可得同布薩</p> <p>偈了テ各ニ三拜。収具ノ踏坐ス。但シ唱白ハ直ニ引テ淨水香湯兩手中四人マ、進前ノ立定ス。時ニ唱白一人、問訊シ抽身ノ、歴<small>後テ</small>淨水ノ後マ、進前ノ立定ス。維那先ツ問訊抽身ノ、歴<small>後テ</small>進テ淨水ノ前ニ問訊シ、長跪合掌ノ、唱テ淨水ノ偈ヲ。</p>

本國某道某州某郡某莊某寺僧伽藍處シキ、
 出家在家ノ菩薩等、自ミ惟レ我カ本師釋迦ニ、
 牟尼佛、告テ諸菩薩ニ言ハク。我レ今イマ、半月ヲ、
 半月、自ミラ誦ス諸佛ノ法戒ヲ。汝等ニ、一切ヲ、
 發心ノ菩薩亦誦ス。乃至テ十發趣ヲ、十長養ヲ、
 十金剛ヲ、十地ノ諸菩薩モ亦誦ス。是故ニ戒光ハ
 從リ口出ス。有リ緣非ズ無レ二因ニ。故カユ光光非ズ
 青黃赤白黒ニ、非レ色ニ、非レ心ニ、非レ有ニ、非レ
 無ニ、非ニ因果ノ法ニ。是レ諸佛ノ之本源、
 行菩薩道ノ之根本ナリ。是レ大衆諸佛子ノ之
 根本ナリ。是レ故ニ大衆諸佛子、應ニ受持ス、
 應ニ讀誦ス。所以ハ、今イマ與レ衆布薩ヲ、誦ス諸
 佛ノ法戒ヲ。以テ此ノ功德ヲ、資シ益シ天龍八部、
 土地伽藍ヲ、回シ向ス三界ノ萬靈ヲ、十方ノ眞
 宰ニ。
 皇帝陛下ヲ、聖化無ク疆ヲ、王公百官、文武
 萬姓、同ク成シ桃李ノ之蹊ヲ、皆守リ安寧ノ之節ヲ。
 同ク成シ桃李ノ之蹊ヲ、皆守リ安寧ノ之節ヲ。
 増シ禪ヲ、法輪常ニ轉セ。檀信施主、増シ上ニ、
 増シ禪ヲ、法輪常ニ轉セ。檀信施主、増シ上ニ、

師僧父母圓ヲ、滿シ種智ヲ。見聞隨喜、虛空法界、
 三途八難、有性無情、皆テ住ニ當ニ法身ニ。
 我レ等ラ誓シラフハ、與ニ一切衆生ニ、從リ此ニ、閻浮
 提、直ニ至シ本道場ニ。
 又白槌一下シテ云

日本國ノ某道某州某郡某山某寺ノ僧ノ掌ス、維レ南閻浮提、大日本國、某ノ道某
 伽藍處、出家在家ノ菩薩等、自ミ惟レ我カ本師釋迦ニ、
 牟尼佛、告テ諸菩薩ニ言ハク。我レ今イマ、半月ヲ、
 半月、自ミラ誦ス諸佛ノ法戒ヲ。汝等ニ、一切ヲ、
 發心ノ菩薩亦誦ス。乃至テ十發趣ヲ、十長養ヲ、
 十金剛ヲ、十地ノ諸菩薩モ亦誦ス。是故ニ戒光ハ
 從リ口出ス。有リ緣非ズ無レ二因ニ。故カユ光光非ズ
 青黃赤白黒ニ、非レ色ニ、非レ心ニ、非レ有ニ、非レ
 無ニ、非ニ因果ノ法ニ。是レ諸佛ノ
 光ハ非ズ青黃赤白黒ニ、非レ色ニ、非レ心ニ、非レ
 之本源、行菩薩道ノ之根本ナリ。是レ大衆諸
 佛子ノ之根本ナリ。是レ故ニ大衆諸佛子、應ニ受持ス、
 應ニ讀誦ス。所以ハ、今イマ與レ衆布薩ヲ、誦ス諸
 佛ノ法戒ヲ。以テ此ノ功德ヲ、資シ益シ天龍八部、
 土地伽藍ヲ、回シ向ス三界ノ萬靈ヲ、十方ノ眞
 宰ニ。
 皇帝陛下ヲ、聖化無ク疆ヲ、王公百官、文武
 萬姓、同ク成シ桃李ノ之蹊ヲ、皆守リ安寧ノ之節ヲ。
 同ク成シ桃李ノ之蹊ヲ、皆守リ安寧ノ之節ヲ。
 増シ禪ヲ、法輪常ニ轉セ。檀信施主、増シ上ニ、
 増シ禪ヲ、法輪常ニ轉セ。檀信施主、増シ上ニ、

諸佛子諦聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《衆中ヨリ三唱、小者即チ取具ノ位ヲ出 收護セヨ。》

三唱了テ、一下ノ云。《

諸佛子諦ニ聽。外ニ有ル清淨ノ大菩薩摩訶薩モ入リ玉ヘ。

清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ

テ、棹邊ニ至テ傍ニ跪坐ス。又棹一下ノ云。《鳴榎一下ノ云。》

諸佛子諦ニ聽。外ニ有ニラハ清淨ノ大菩薩摩訶薩モ入リ玉ヘ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

我菩薩比丘某甲爲レ衆ノ行レテ籌ヲ布薩ス。衆

詞薩入リ玉ヘ。

《三唱了テ、而鳴榎一下ノ云。》

《三唱了テ、一下ノ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

當下一心念、布薩上。願上中下座、各々次第二

如法ニ受ム也籌ヲ。《鳴レ榎一下。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

鳴榎了テ、兩手横ニ籌ヲ、問訊、歴テ卓ノ西

邊マ、到テ正面ニ問訊、近テ卓ノ前ニ、行ニ聖

僧一。僧數隨レ處。卓ノ前ニ問訊、右ニ轉レテ身マ、從ニ上座、次第二行レテ籌。《但シ主人

前ニ問訊。》

《願上ヨリ三唱シテ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

身マ、從ニ上座、次第二行レテ籌。《但シ主人

前ニ問訊。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

前ニ問訊。》

《願上ヨリ三唱シテ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

大衆受レテ籌、各々誦フ偈ヲ云。

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有

《願上ヨリ三唱シ、又棹一下シテ云。》

諸佛子諦ニ聽。衆中ノ小者已ニ收護、外ニ有ル清淨ノ大菩薩已ニ入リ。内外寂靜ニシテ、無シ諸ノ難事。堪レタリ可キ三行レテ籌ヲ廣ク作ス布薩上リ。

<p>⑨ 金剛無礙解脱籌 難得難遇如金果 我今頂戴歡喜受 一切衆生亦如是</p>	<p>⑨ 金剛無礙解脱籌 難得難遇如金果 我今頂戴歡喜受 一切衆生亦如是</p> <p>〈偈了テ、小者和尚ノ前ニ進テ和尚ヨリ次 第二籌ヲ取ル。取り了テ籌ヲ維那ニ渡シ、 亦傍ニ坐ス。維那亦籌ヲ持テ榎一下メ云。〉 (五才)</p>	<p>⑨ 受籌ノ偈 金剛無礙解脱籌 難得難遇如金果 我今頂戴歡喜受 一切衆生亦如是</p> <p>主人大衆受レテ籌唱レ偈了レハ、小者從リ主人ノ 前、次第二取レ籌ヲ來ル。都計ニ度ス維那一。 維那又テ行テ在家ノ籌。先ッ到テ榎遣ニ去テ袂 子マ、白榎一下ノ云。</p>	<p>⑨ 受籌ノ偈 金剛無礙解脱籌 難得難遇如金果 我今頂戴歡喜受 一切衆生亦如是</p> <p>〈受レ籌皆了テ、而ノ唱レ偈ヲ還籌。小者從 ニ戒師、次第二取レ之。〉</p>
<p>⑪ 諸佛子諦聽ケ。次ニ行ニ在家ノ菩薩籌。ハ三 唱鳴榎一下。〳〵 行レ籌誦シテ偈。同シ前ニ。在家行レ籌ヲ畢マ 都計ノ後、維那取テ籌ヲ還テ入ニ榎邊ノ之西 北。小者、相隨フ。維那ハ東、小者ハ西。</p>	<p>⑪ 諸佛子諦ニ聽。次ニ行ニ在家ノ菩薩ニ籌一。 〈次行ヨリ三唱メ又榎一下メ在家ノ籌ヲ行。 小者跡ヨリ籌ヲ取り、了テ維那小者榎邊 ニ坐ス。維那ハ東ニ面、小者ハ西ニ向テ、 相對ノ籌ヲ受ク。先ッ維那一籌ヲ受ケ偈 取レ籌。還テ到ニ榎邊ノ西北ニ、小者相隨</p>	<p>⑪ 諸佛子諦ニ聽ヘ。次ニ行ニ在家ノ菩薩ニ籌一。 〈次ニ已下三唱了レ、而鳴榎一下。覆テ袂子 掲、行テ籌ヲ於在家ノ菩薩ニ。唱レ偈如シ前。 度與ス偈白。時ニ唱白取レ籌。到リ榎所ニ、 小者モ隨ヒ至テ、唱白ハ東、小者ハ西、相 對胡跪、唱白仰テ右手ヲ、捧ニ一籌ヲ唱フ受</p>	<p>⑪ 諸佛子諦ニ聽ヘ。次ニ行ニ在家ノ菩薩ノ籌ヲ。 念受籌。還籌唱白モ皆與レ僧同シ。小者又取 度與ス偈白。時ニ唱白取レ籌。到リ榎所ニ、 小者モ隨ヒ至テ、唱白ハ東、小者ハ西、相 對胡跪、唱白仰テ右手ヲ、捧ニ一籌ヲ唱フ受</p> <p>⑩ 還籌ノ偈 具足清淨受此籌 具足清淨還此籌 堅固喜捨無闕犯 一切衆生亦如是</p> <p>〈小者聚メ了テ、計ニ度與ス偈白ニ。此ノ後ニ 行ニ在家ノ籌一。唱白再ヒ到テ榎所ニ去テ袂ヲ 一下ノ唱テ云。〉</p>

相對ノ胡跪。維那仰シテ右手ヲ、捧テ一籌ヲ唱。唱了テ小者ニ渡ス。又惣籌ヲ取テ、維那ハ東、小者ハ西。相對胡跪。維那籌ノ偈ヲ。又唱テ還籌ノ偈ヲ、與テ小者ニ。小
說レ偈ヲ畢シ、ハ、小者取レ籌ヲ。又受テ自分ノ小者ニ一籌ヲ與フ。小者受テ偈ヲ唱テ、仰テ右手ヲ、捧テ一籌ヲ、唱レ偈ヲ了レハ、小者モ同シ右。時ニ唱白、度與ニ總籌ヲ於小
籌ヲ、右手ニ捧ケ以テ、說レ偈ヲ畢シ、小者、兩人維那ニ渡ス。兩人相共ニ起テ、惣籌ヲ小者ニ渡ス。小者籌ヲ持テ和尚ノ前ニ至テ、
共ニ起テ、維那總、與テ籌ヲ於小者。小者者ニ渡ス。小者籌ヲ持テ和尚ノ前ニ至テ、了レハ、兩人共ニ起テ、維那與テ總籌ヲ於小者。云々、出家ノ菩薩、
横レテ、進テ主人ノ前ニ、問訊シ、主人胡跪ノ報シテ云。小者兩手ニ捧レ籌ヲ、進テ主人ノ前ニ、報シテ云、千人。出家在家ノ菩薩、
同ク合掌ヲ取レ籌ヲ。小者問訊、密ニ報シテ云。出家ノ菩薩若干人。在家ノ菩薩若干人。出家言訖、度與テ戒師ニ而歸ル。時ニ唱白、至
出家在家ノ菩薩、合テ若干人。維那默然ト在家ノ菩薩總テ若干人ト云テ、度ヲ於主人。戒師ノ前ニ。戒師言テ人数ヲ、乃度與テ唱
聽テ、問訊進テ、榧下一白榧一下。主人取レ籌ヲ、如テ小者ノ唱。度ニ維那ニ。維白ニ。唱白問訊ヲ取レ籌ヲ、到テ榧所ニ、去
諸佛子諦聽。此一住處、一布薩。出家乃白榧一下ノ云々、
在家ノ菩薩、總若干人、各於佛法中、清淨ニ秉持、和合布薩。上順佛
清淨ニ秉持、和合布薩。上順佛中報ニ四恩、下爲含識、各應奉
念釋迦牟尼佛。上、鳴榧一下ノ云々、
維那進テ取レ坐具。上、鳴榧一下ノ云々、

ヲ唱。唱了テ小者ニ渡ス。又惣籌ヲ取テ、維那ハ東、小者ハ西。相對胡跪。維那籌ノ偈ヲ。又唱テ還籌ノ偈ヲ、與テ小者ニ。小
者ニ一籌ヲ與フ。小者受テ偈ヲ唱テ、仰テ右手ヲ、捧テ一籌ヲ、唱レ偈ヲ了レハ、小者モ同シ右。時ニ唱白、度與ニ總籌ヲ於小
者ニ渡ス。兩人相共ニ起テ、惣籌ヲ小者ニ渡ス。小者籌ヲ持テ和尚ノ前ニ至テ、了レハ、兩人共ニ起テ、維那與テ總籌ヲ於小者。云々、出家ノ菩薩、
胡跪ノ報シテ云。小者兩手ニ捧レ籌ヲ、進テ主人ノ前ニ、報シテ云、千人。出家在家ノ菩薩、都テ若干人。出家言訖、度與テ戒師ニ而歸ル。時ニ唱白、至
出家ノ菩薩若干人。在家ノ菩薩若干人。出家言訖、度與テ戒師ニ而歸ル。時ニ唱白、至
出家ノ菩薩若干人ト云テ、度ヲ於主人。戒師ノ前ニ。戒師言テ人数ヲ、乃度與テ唱
主人取レ籌ヲ、如テ小者ノ唱。度ニ維那ニ。維白ニ。唱白問訊ヲ取レ籌ヲ、到テ榧所ニ、去
那問訊ヲ取レ籌ヲ、到テ榧所ニ、去
乃白榧一下ノ云々、
諸佛子諦聽。此一住處、一布薩。出家
清淨ニ秉持、和合布薩。上順佛
中報ニ四恩、下爲含識、各應奉
念釋迦牟尼佛。上、鳴榧一下ノ云々、
維那進テ取レ坐具。上、鳴榧一下ノ云々、

ヲ唱。唱了テ小者ニ渡ス。又惣籌ヲ取テ、維那ハ東、小者ハ西。相對胡跪。維那籌ノ偈ヲ。又唱テ還籌ノ偈ヲ、與テ小者ニ。小
者ニ一籌ヲ與フ。小者受テ偈ヲ唱テ、仰テ右手ヲ、捧テ一籌ヲ、唱レ偈ヲ了レハ、小者モ同シ右。時ニ唱白、度與ニ總籌ヲ於小
者ニ渡ス。兩人相共ニ起テ、惣籌ヲ小者ニ渡ス。小者籌ヲ持テ和尚ノ前ニ至テ、了レハ、兩人共ニ起テ、維那與テ總籌ヲ於小者。云々、出家ノ菩薩、
胡跪ノ報シテ云。小者兩手ニ捧レ籌ヲ、進テ主人ノ前ニ、報シテ云、千人。出家在家ノ菩薩、都テ若干人。出家言訖、度與テ戒師ニ而歸ル。時ニ唱白、至
出家ノ菩薩若干人。在家ノ菩薩若干人。出家言訖、度與テ戒師ニ而歸ル。時ニ唱白、至
出家ノ菩薩若干人ト云テ、度ヲ於主人。戒師ノ前ニ。戒師言テ人数ヲ、乃度與テ唱
主人取レ籌ヲ、如テ小者ノ唱。度ニ維那ニ。維白ニ。唱白問訊ヲ取レ籌ヲ、到テ榧所ニ、去
那問訊ヲ取レ籌ヲ、到テ榧所ニ、去
乃白榧一下ノ云々、
諸佛子諦聽。此一住處、一布薩。出家
清淨ニ秉持、和合布薩。上順佛
中報ニ四恩、下爲含識、各應奉
念釋迦牟尼佛。上、鳴榧一下ノ云々、
維那進テ取レ坐具。上、鳴榧一下ノ云々、

⑬	散華莊嚴遍十方 散衆寶華以爲帳	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	是レ毘舍那 _モ 誦 _ス 。我亦如 _レ 是 _レ 誦 _ス 。汝 _チ 新	學 _ヲ 菩薩 頂戴 _{受_テ} 持 _{戒_イ} 。へ槌 _一 下、云
⑬	散華莊嚴遍十方 散衆寶華以爲帳	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	へ偈ヲ唱出 _ス 時、淨水散華香湯ノ三人次第	二位ヲ出 _テ 、進前 _ノ 各自ノ器ヲ持 _テ 、
⑬	散華莊嚴淨光明 散衆寶華以爲帳	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	偈畢 _テ 鳴 _レ 槌 _一 下、三人旋遶 _一 一 _ニ 匠 _ヲ 了 _テ 著 _レ ク	へ次 _ニ 燒 _ク 人 _一 起 _テ 座 _{ヨリ} 進 _テ 戒師ノ前 _ニ 、執 _二
⑬	散華莊嚴遍十方 散衆寶華以爲帳	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	明、大衆和 _レ 之 _三 返 _ス	
⑬	散華莊嚴遍十方 散衆寶華以爲帳	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	へ偈ヲ唱出 _ス 時、淨水散華香湯ノ三人次第	二位ヲ出 _テ 、進前 _ノ 各自ノ器ヲ持 _テ 、
⑬	散華ノ偈	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	偈畢 _テ 鳴 _レ 槌 _一 下、三人旋遶 _一 一 _ニ 匠 _ヲ 了 _テ 著 _レ ク	へ次 _ニ 燒 _ク 人 _一 起 _テ 座 _{ヨリ} 進 _テ 戒師ノ前 _ニ 、執 _二
⑬	散華ノ偈	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	明、大衆和 _レ 之 _三 返 _ス	
⑬	散華莊嚴遍十方 散衆寶華以爲帳	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	是レ毘舍那 _モ 誦 _ス 。我亦如 _レ 是 _レ 誦 _ス 。汝 _チ 新	學 _ヲ 菩薩 頂戴 _{受_テ} 持 _{戒_イ} 。へ槌 _一 下、云
⑬	散華莊嚴遍十方 散衆寶華以爲帳	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	へ偈ヲ唱出 _ス 時、淨水散華香湯ノ三人次第	二位ヲ出 _テ 、進前 _ノ 各自ノ器ヲ持 _テ 、
⑬	散華ノ偈	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	偈畢 _テ 鳴 _レ 槌 _一 下、三人旋遶 _一 一 _ニ 匠 _ヲ 了 _テ 著 _レ ク	へ次 _ニ 燒 _ク 人 _一 起 _テ 座 _{ヨリ} 進 _テ 戒師ノ前 _ニ 、執 _二
⑬	散華ノ偈	散衆寶華遍十方 供養一切諸如来	明、大衆和 _レ 之 _三 返 _ス	

<p>傍ニ坐ス。梵音ノ人槌聲ヲ听テ唄ヲ唱ク。 唄ノ間、徐々トノ散華スルナリ。唄云、</p>	<p>15 如来 妙色 (七才)</p>	<p>15 唄文 如来 妙色 身世</p>	<p>14 焼香ノ偈 戒香定香解脱香 光明雲臺徧法界 供養十方無量佛 見聞普熏證菩提</p>
<p>14 戒香定香解脱香 光明雲臺徧法界 供養十方無量佛 見聞普熏證菩提</p>	<p>14 如來 妙色 (七才) 身世 (八才)</p>	<p>唄了テ焼香人、取テ坐具ヲ起テ進ニ主人前。 問訊ノ左ニ轉身ヲ進ニ正面ニ三拜ス。胡跪ノ具</p>	<p>14 焼香ノ偈 戒香定香解脱香 光明雲臺徧法界 供養十方無量佛 見聞普熏證菩提</p>
<p>14 人、唄了テ位ヲ出テ、進前シテ大展三拜ノ、 具上ニ胡跪ス。殿主手炬ヲ捧テ與フ。焼 香ノ人、炬ヲ (ハウ) 持テ三ツ梅檀ヲ炷ク。 維那槌一下ノ焼香ノ偈唱。偈云、</p>	<p>14 問訊ノ左ニ轉身ヲ進ニ正面ニ三拜ス。胡跪ノ具 上ニ持テ柄爐ヲ焼香ス。時ニ維那到テ槌遣ニ去リ 袂子ヲ、白槌一下ヲ拏テ焼香ノ偈ヲ。大衆同ク 自ニ第一句ニ和ス。</p>	<p>14 人、唄了テ置テ爐ヲ、歸レル位。時ニ梵音在レテカラ座ニ 挙レテ唄ヲ。或ハ唄テ手聲ヲ、</p>	<p>15 如来唄 (頁八一)</p>
<p>16 偈畢テ鳴レ槌ヲ二下、維那著座。説戒畢。</p>	<p>16 戒香定香解脱香 (和) 光明雲臺徧法界 供養十方無量佛 見聞普熏證菩提</p>	<p>16 焼香偈 戒香定香解脱香 光明雲臺徧法界 供養十方無量佛 見聞普熏證菩提</p>	<p>16 如来 妙色 身世</p>
<p>16 了テ燒香ノ人、具ヲ取テ、和尚ノ前ニ進 テ一觸禮ノ位ニ歸ル。維那モ同ク本位ニ 着ク。和尚三ツ香ヲ燒キ、三下尺ヲ鳴シ、 開經ノ偈三唱ノ、戒本ヲ繙キ拂一拂シテ</p>	<p>16 了テ燒香ノ人置テ柄爐ヲ、取テ坐具ヲ右ニ轉 テ進ニ主人前ニ問訊ノ著レ位。維那鳴レ 身、進ニ主人前ニ問訊ノ著レ位。維那鳴レ 着ク。和尚三ツ香ヲ燒キ、三下尺ヲ鳴シ、 開經ノ偈三唱ノ、戒本ヲ繙キ拂一拂シテ</p>	<p>16 至テ斯ニ有テ三何ノ衆カ、戒師與ニ唱白ニ問答、 誦テ戒ノ序ヲ。大衆ハ、胡跪、合掌ノ而聽ヲ。 戒師、問テ云ク、此ノ中未受菩薩戒、不清</p>	<p>16 誦テ戒ノ序ヲ。大衆ハ、胡跪、合掌ノ而聽ヲ。 戒師、問テ云ク、此ノ中未受菩薩戒、不清</p>

<p>說戒又。梵網ノ全本ヲ誦ス。或八十重戒、或ハ輕戒、時ニ隨ベシ。說戒已テ回向ス、回向云、</p>	<p>下、三ヒ唱テ開經ノ偈、而讀梵網經。序中至テ諸佛子等合テ掌ヲ至心ニ聽、處ニ維那鳴レテ手聲、一下ス。大衆胡跪合掌。又テ至下如「少水ノ魚」、斯ニ有「何ノ樂」處、主人ト與「維那」問答ス。</p>	<p>淨ノ者、已ニ出ル。ハ唱曰、答云、已ニ出。ハ若シ無レハ者答フ此ノ中無ト未受菩薩戒、不清淨ノ者、ハ又問、衆今、和合ス。答云、至下如「少水ノ魚」、斯ニ有「何ノ樂」處、主人ト與「維那」問答ス。</p>
<p>主人問テ云、此ノ中未受菩薩戒、不清淨ノ者、已ニ出ル。維那答云、已ニ出。ハ若シ無レハ者、答フ此ノ中無ト未受菩薩戒不清淨ノ者、</p>	<p>主人問テ云、此ノ中未受菩薩戒、不清淨ノ者、已ニ出ル。維那答云、已ニ出。ハ若シ無レハ者、答フ此ノ中無ト未受菩薩戒不清淨ノ者、</p>	<p>ハ又問、欲レセルヤ作「何ノ事」ヲ。答云、說戒ノ布薩、ハ又問、不來囉受、菩薩、有レテカ幾ク人、説ク欲及ヒ清淨。當ニ一心ニ聽。答云、此ノ中、無ト不來囉受、菩薩。</p>
<p>又問マ、衆今、和合ス。答テ云、和合ス。又問マ、欲レセルヤ作「何ノ事」ヲ。答云、說戒布薩。又問マ、不來囉受、菩薩有「幾人」ト、説ク欲ク及ヒ清淨。衆當ニ一心ニ聽ク。答テ云、此ノ中、無ト不來囉受、菩薩。</p>	<p>又問マ、衆今、和合ス。答テ云、和合ス。又問マ、欲レセルヤ作「何ノ事」ヲ。答云、說戒布薩。又問マ、不來囉受、菩薩有「幾人」ト、説ク欲ク及ヒ清淨。衆當ニ一心ニ聽ク。答テ云、此ノ中、無ト不來囉受、菩薩。</p>	<p>ハ若シ有レハ者、答フ有レト幾ク人。問答了テ、誦ス戒經ヲ。從「我今盧舍那、大衆趺坐、合掌ノ而聽。誦竟、戒師自白」回向ノ文。</p>
<p>以テ上來布薩說戒所生ニ業ノ功德、奉レ供ト</p>	<p>捧ニ上來說戒布薩所生ニ慧業、爲シ光明雲</p>	<p>捧ニ上來說戒布薩所生ニ慧業、爲シ光明雲</p>
<p>17</p>	<p>17 回向</p>	<p>17 回向文</p>

<p>養_シ三世十方等正覺證菩提者_上。所_ハ期_{スル}。蓋_ト、爲_シ華縵雲蓋_ト。奉_ル供養_シ三世十方、如_レ是供養歷劫操持_テ、永_ク得_シ不_レ(九才) 應正等覺證菩提者_ヲ。歷劫恭敬、得_シ不退轉_ヲ。次_ニ回_下向_ス、上界_ノ天王天衆、下</p>	<p>蓋_ト、爲_シ華縵雲蓋_ト。奉_ル供養_シ三世十方、應正等覺證菩提者_ヲ。歷劫恭敬、得_シ不退轉_ヲ。以_テ此_ノ善利_ヲマ、祝_下獻_ス、上界_ノ天王</p>	<p>蓋_ト、爲_シ華縵雲蓋_ト。奉_ル供養_シ三世十方、應正等覺、證菩提者_ト。伏_テ願_シ、歷劫恭敬、得_シ不退轉_ヲ。以_テ此_ノ善利_ヲマ、祝_下獻_シト、</p>
<p>界_ノ龍王龍衆、日本國中天神地祇、諸大権現、諸大明神、當山鎮守、白山妙理大権現、伊勢大神宮、八幡大菩薩、春日大明</p>	<p>天衆、下界_ノ龍王龍衆、日本國中天神地祇、諸大明神、當山鎮守、白山妙理大権現、稻成大明神、住吉大明神、伽</p>	<p>上界_ノ天王天衆、下界_ノ龍王龍衆、日本國中天神地祇、天照皇太神宮、八幡大菩薩、春日大明神、諸大権現、諸大明神、洞家</p>
<p>神、稻荷大明神、住吉大明神、伽藍_ノ真宰、土地_ノ神靈、護法_ノ諸天、招寶七郎大権修</p>	<p>藍土地、護法龍天、招寶七郎大権修理菩薩、合堂_ノ真宰、今年_ノ歲分、主執_シ陰陽_マ</p>	<p>宗廟、及城邑山林_ノ大小神祇、當山鎮守、伽藍土地、招寶七郎大権修理菩薩、合堂_ノ</p>
<p>賞善罰惡一切_ノ聰明、本州_ノ総社、城隍山</p>	<p>明、本州_ノ総社別社、城隍山林大小_ノ神祇、真宰、今年_ノ歲分_ニ主執_シ陰陽_マ、權衡_ト</p>	<p>權衡_ト、一切_ノ聰明、本寺_ノ檀那及_ヒ十方檀越、現前_ノ清衆、行者_ノ人力</p>
<p>林大小_ノ神祇_上。本寺大小檀那本命元辰、十方檀越現前_ノ僧衆行者_ノ人力、各各_ノ本命元辰、各各_ノ當年_ノ屬星、各各_ノ當年_ノ屬星、各各_ノ倍_シ垂迹_ノ威光_マ、專_ラ願_シ、金輪聖王、今上皇帝、玉體康寧、等_ク、各各_ノ本命元辰、各各_ノ當年_ノ屬星_上。</p>	<p>檀那及_ヒ十方檀越、現前_ノ清衆、行者_ノ人力、各各_ノ當年_ノ屬星、各各_ノ當年_ノ屬星_上。</p>	<p>檀那及_ヒ十方檀越、現前_ノ清衆、行者_ノ人力、各各_ノ當年_ノ屬星、各各_ノ當年_ノ屬星_上。</p>
<p>増_シテ本地_ノ法衆_ヲ、照_シ其_カ所願_ヲ。專_ラ祈_シ、金輪聖王、今上皇帝、國界清平、玉_ノ之雨_ノ不_レ破_レ塊_ヲ、蘭寮竹園之中_ニハ、蘭竹</p>	<p>國界清平_ニ、射山_ノ之風_ノ不_レ鳴_レ條_ヲ、泫水_ノ雨_ノ不_レ破_レ塊_ヲ、蘭寮竹園之中_ニハ、蘭竹</p>	<p>國界清平_ニ、射山_ノ之風_ノ不_レ鳴_レ條_ヲ、泫水_ノ雨_ノ不_レ破_レ塊_ヲ、蘭寮竹園之中_ニハ、蘭竹</p>
<p>不_レ穿_レ塊_ヲ、天下普_ク扇_ニ有_シ道_ノ之德_ヲ、卒土_ノ咸_テ唱_フ太平_ノ之謠_ヲ。更_ニ祈_シ、源大相國誠意</p>	<p>天下皆_テ扇_ニ有_シ道_ノ之德_ヲ、率_テ悉_ク歌_フ同_ク穩_カ、天下皆_テ扇_ニ有_シ道_ノ之德_ヲ、更_ニ祈_シ、東</p>	<p>同_ク穩_カ、天下皆_テ扇_ニ有_シ道_ノ之德_ヲ、更_ニ祈_シ、東</p>

<p>護法ノ長者居士、歸依ノ善男善女、遐邇ノ施者居士、歸依ノ信男善女、大小ノ施主、結都ノ征夷大將軍及本城ノ府君、文武ノ官僚、主、結縁ノ道俗、福壽円満、信心增長、縁道俗、皆悉ノ福壽無量、種智円満、永ク爲_シノ金城湯地ト。加之、一聞隨喜之輩、低頭合掌之人モ、亦_タ入_リテ一戒光明ノ之中ニ、同ク破_レ無明極重ノ之闍ヲ。所_レ集_ル殊勲ハ、唯非_レ轉_ステ、從前ノ法輪マ、直ニ續_テ龍華三會ノ法席マ、以_テ酬_ヒル。永平開山和尚、同_ク二世和尚、當寺開山和尚、當寺歴代諸位和尚、三國伝燈歴代祖師等之_レ法乳ノ恩ニ。且望_ハ有縁無縁六導ノ含靈、前亡後滅、屬_ク齊照_{サレ}重々ノ之戒光、俱_ニ得_テ當々ノ之法身。如上無私之修勲ハ、用_テ回_ス三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。</p>	<p>縁道俗、皆悉ノ福壽無量、種智円満、加之、一聞隨喜之輩、低頭合掌之人モ、亦_タ入_リテ一戒光明ノ之中ニ、同ク破_レ無明極重ノ之闍ヲ。所_レ集_ル殊勲ハ、唯非_レ轉_ステ、從前ノ法輪マ、直ニ續_テ龍華三會ノ法席マ、以_テ酬_ヒル。永平開山和尚、同_ク二世和尚、當寺開山和尚、當寺歴代諸位和尚、三國伝燈歴代祖師等之_レ法乳ノ恩ニ。且望_ハ有縁無縁六導ノ含靈、前亡後滅、屬_ク齊照_{サレ}重々ノ之戒光、俱_ニ得_テ當々ノ之法身。如上無私之修勲ハ、用_テ回_ス三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。</p>	<p>護法ノ長者居士、歸依ノ信男善女、大小ノ施主、結都ノ征夷大將軍及本城ノ府君、文武ノ官僚、主、結縁ノ道俗、皆悉ノ福壽無量、種智円満、永ク爲_シノ金城湯地ト。加之、一聞隨喜之輩、低頭合掌之人モ、亦_タ入_リテ一戒光明ノ之中ニ、同ク破_レ無明極重ノ之闍ヲ。所_レ集_ル殊勲ハ、唯非_レ轉_ステ、從前ノ法輪マ、直ニ續_テ龍華三會ノ法席マ、以_テ酬_ヒル。永平開山和尚、同_ク二世和尚、當寺開山和尚、當寺歴代諸位和尚、三國伝燈歴代祖師等之_レ法乳ノ恩ニ。且望_ハ有縁無縁六導ノ含靈、前亡後滅、屬_ク齊照_{サレ}重々ノ之戒光、俱_ニ得_テ當々ノ之法身。如上無私之修勲ハ、用_テ回_ス三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。</p>
<p>回向了_テ梵音ノ人、後唄ヲ唱フ。唄云。 (一〇才)</p>	<p>十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。</p>	<p>諸尊菩薩摩訶薩、(頁八一四) 摩訶般若波羅蜜。</p>

<p>⑱ 處世界<small>シヨセカイ</small> 如虚空<small>ニヨキヨコウ</small> 如蓮華<small>シロレンケワ</small> 不著水<small>フチカケス</small> 心清淨<small>シンセイジヨウ</small> 超於彼<small>シュウヤカニ</small> 稽首禮<small>ケイシュレイ</small> 無上尊<small>ムジョウソン</small> 槌一下云。</p>	<p>⑱ 處世界如虚空 如蓮華不着水 心清淨超於彼 稽首禮無上尊 〈唄了テ戒師下座ノ中央ニ至テ立ツ。行者拜席ヲ展ブ。大衆モ齊ク起立ス。維那大磬ヲ鳴ス一一下シテ云。〉</p>	<p>⑱ 頌文 處世界 如虚空 如蓮華 不著水 心清淨 超於彼 稽首禮 無上尊</p>	<p>⑱ 後面 處世界如虚空 如蓮華不著水 心清淨超於彼 稽首禮無上尊 正面三拜。跪白<small>レ</small>云々、某甲敬<small>テ</small>謝<small>テ</small>衆僧<small>マ</small>、僧差誦戒、三業不懃<small>コト</small>。戒文生濫。坐久延遲、令衆生惱。願衆慈悲。布施歡喜、白已<small>テ</small>歸<small>レ</small>位<small>ニ</small>。次<small>ニ</small>梵音<small>ノ</small>人、唱<small>フ</small>後唄<small>ヲ</small>。〉</p>
<p>⑲ 一切恭敬<small>イツセキケイ</small> 自歸依佛<small>ジキイボツ</small> 當願衆生<small>トウケンジュウセイ</small> 體解大道<small>タイカイ</small> 發無上意<small>ハツフ</small> 槌一下云。</p>	<p>⑲ 一切恭敬 〈又磬ヲ鳴ス一一下三歸ヲ唱。衆和ス。〉 自歸依佛 〈和〉當願衆生 體解大道 發無上意</p>	<p>⑲ 三歸ノ禮文〈維那、鳴<small>レ</small>槌一下<small>ヲ</small>唱<small>テ</small>云 一切恭敬〈大衆一拜<small>ヲ</small>而起立。維那鳴<small>レ</small>槌一下<small>ヲ</small>拳<small>ニ</small>云 自歸依佛〈衆和〉當願衆生 體解大道 發無上意〈大衆一拜、同槌一下〉 自歸依法〈衆和〉當願衆生 深入經藏 智慧如海〈大衆一拜、同槌一下〉 自歸依僧〈衆和〉當願衆生 深入經藏 智慧如海</p>	<p>⑲ 三歸禮〈唱白、一下<small>ヲ</small>唱<small>テ</small>云 一切恭敬〈大衆三拜<small>ヲ</small>而立。亦一一下、拳<small>ヲ</small>自歸<small>マ</small>、而從<small>ニ</small>當願<small>一</small>、衆和<small>ス</small>。一歸<small>了</small>テ、衆一拜<small>ヲ</small>而立。三歸共<small>ニ</small>同<small>シ</small>。〉 自歸依佛〈衆和〉當願衆生 體解大道 發無上意 自歸依法〈衆和〉當願衆生 深入經藏 智慧如海</p>
<p>自歸依僧 當願衆生 深入經藏 智慧如海 槌一下云。</p>	<p>⑲ 一切無礙 智慧如海 〈又磬ヲ鳴ス一一下。〉</p>	<p>⑲ 智慧如海 智慧如海 自歸依僧〈衆和〉當願衆生 深入經藏 智慧如海</p>	<p>⑲ 智慧如海 智慧如海 自歸依僧〈衆和〉當願衆生 深入經藏 智慧如海</p>

⑳ 上來説戒功德。散霈法界和南聖衆。槌一下。

自歸依偈 〈和〉 當願衆生 統理大衆
一切無碍
又聲ヲ鳴ス一一下ノ云。

⑳ 上來説戒功德。散霈法界和南聖衆。
又聲ヲ鳴ス一一下ノ、四快ノ偈ヲ拵ス。
衆和ス偈云。

諸佛出世第一快 〈和〉 聞法奉行安穩快
大衆和合寂滅快 衆生離苦得脫快

㉑

諸佛出世第一快 聞法奉行安穩快
大衆和合寂滅快 衆生離苦得脫快
鳴レ槌ヲ二下。

諸佛出世第一快 〈和〉 聞法奉行安穩快
大衆和合寂滅快 衆生離苦得脫快

偈了テ一齊二三拜ノ、坐具ヲ収ム。維那
手磬ヲ鳴ノ、衆ヲ引テ左ニ轉ジ、一匝ノ
露地ノ位ニ出テ、立テ普同問訊ノ、和尚
ヲ送テ三拜シ(十一才)テ退散ス。

維那 焼香 浄水 散華 小者
戒師請待之圖
唄師 唄師 香湯 手巾 手巾

右布薩儀規終 (十一ウ)

一切無礙 〈大衆一拜〉

㉑ 普回向 〈維那、鳴レ槌一下ノ唱云〉

上來説戒功德。散霈法界和南聖衆。

主人大衆、同テ三拜。収テ坐具ヲ立。主人、
一揖ヲ乃歸テ本位ニ立ツ。維那鳴レ槌一下ノ、
拵ニ四快ノ偈。大衆同自(第二句)和。

㉒ 四快ノ偈

諸佛出世第一快 聞法奉行安穩快
大衆和合寂滅快 衆生離苦得脫快

偈了テ鳴レ槌ニ下、乃レ覆テ袱子ヲ、歸リ本位ニ、
打シ手磬ヲ、引レ衆ヲ出堂。維那先ツ從リ前
門ノ西類ニ出ツ。次ニ焼香手中諸位、次第ニ
隨レ後ニ而出ツ。著ニ堂前ノ位ニ、如レ始。

主人最後ニ出也。二侍者退テ列位ヲ、携テ
拂子香合ヲ隨テ主人後ニ出也。主人大衆
普同問訊ノ退散ス矣。

布薩式畢

自歸依偈 〈衆和〉 當願衆生 統理大衆
一切無礙

㉑ 普回向 〈唱白、一下ノ獨唱〉

上來説戒功德。散霈法界和南聖衆。

戒師大衆、同テ三拜。収テ坐具ヲ胡跪ス。
唱白一下ノ拵ニ四快ノ偈。大衆自リ聞法和ス
之ヲ

㉒ 四快ノ偈

諸佛出世第一快 聞法奉行安穩快
大衆和合寂滅快 衆生離苦得脫快

偈了テ一下ノ、覆レテ袱子ヲ、歸リ本位ニ、
打シ手磬ヲ、引レ衆ヲ出堂。唱白先ツ從リ前門ノ
西類ニ出ツ。次ニ焼香手中ノ諸位、次第ニ隨レ
後ニ而出ツ。歸ニ堂前ノ位ニ、如レ始。戒

師ハ末ニ出ツ、二侍捧テ拂子香合ヲ隨レ後ニ。
普同問訊ノ而散ス。

(奥書)

貞享丙寅之冬、梅岑首座、寄紙而乞贖於

四座講式。予荷河潤恩故、不顧筆力拙、

塞白應命^矣 加陽金城護國山裡觀海拜手

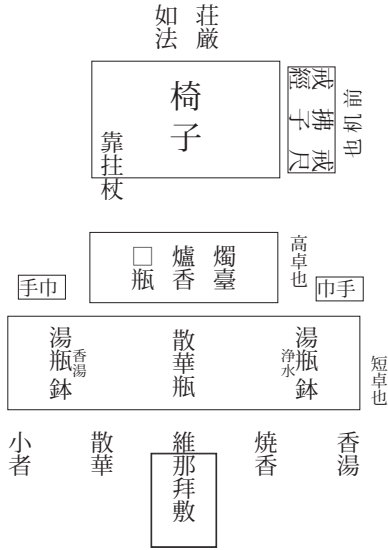
印
印

(図B1)

(図B2)

『瑩山清規』 「菩薩戒布薩式」 「愚休本」

図A. 布薩之堂莊嚴圖



図B. 菩薩戒布薩式

山門
 今月白月十五日布薩食後
 行法事
 戒師 堂頭和尚〈隨時或尊宿或老僧〉
 梵音 某甲上座
 唱白 某甲上座〈隨時。半夏者知客唱白也〉
 燒香 某甲上座
 淨水 某甲上座
 散華 某甲上座
 香湯 某甲上座
 手巾 某甲上座
 小者 某甲上座
 手巾 某甲上座
 右各具威儀、聞鐘聲集。

貞享本『菩薩戒布薩之儀規』

図A.

山門

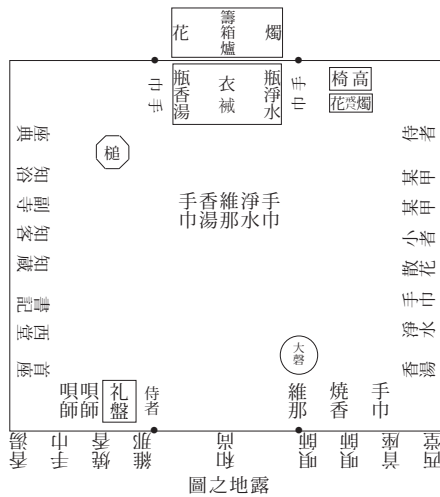
白
黒月十五日布薩説戒法務用僧差定

開左

- 戒師 堂頭和尚
 - 唄師 某甲上座
 - 唄師 某甲上座
 - 唱白 某甲上座
 - 燒香 某甲上座
 - 淨水 某甲上座
 - 香湯 某甲上座
 - 散華 某甲上座
 - 手巾 某甲上座
 - 小者 某甲上座
 - 手巾 某甲上座
- 右伏幸衆慈悉容
本月日 堂司比丘吳謹誌

(二丁)

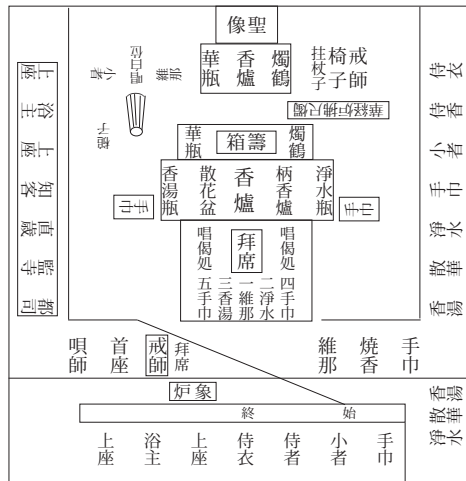
図B.
露地之圖



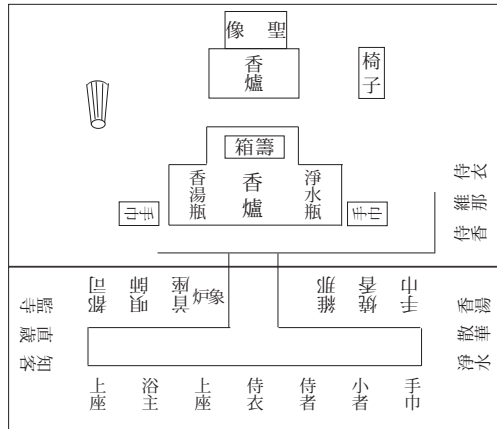
- 淨水
- 手巾
- 散花
- 小者
- 某甲
- 某甲
- 典座
- 知浴
- 副寺
- 知客
- 知藏
- 書記

明和本『大布薩式』

図B1. 道場莊嚴之圖



図B2.



面山本『洞上大布薩法』
洞上大布薩法

〔対シテ〕曰マ堂前ニ預メ出ス用僧照牌ノ圖ト、道場莊嚴ノ圖ヲ。浄水漉シ之ヲ、湯ハ煎ニス衆香ヲ。衣被ニ盛リ葩ヲ、冬ハ用ニフ綵花ヲ。朝課次誦ニ般若心經ヲ、加ニ持ス之ヲ

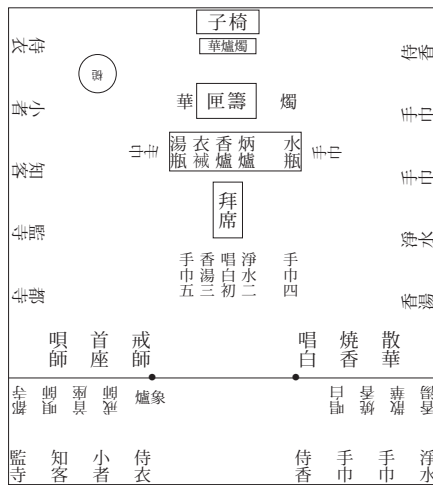
図A. 照牌ノ圖

山門

黑白某日十四十五布薩食後行法事
 戒師 某甲和尚
 梵唄 某甲職号
 唱白 某甲同
 焼香 某甲同
 散華 某甲同
 浄水 某甲同
 香湯 某甲同
 手巾 某甲同
 同 某甲同
 小者 某甲同
 右各具威儀聞鐘聲集
 本月某日 堂司比丘某甲敬白

(頁八〇六)

〔入〕堂、唱白引ニテ焼香ヲ、自ニ西類次第二入マ、而对ニ列ス于座ニ。戒師ハ爲リ末後ニ。出堂モ同シ之ニ。大衆ハ依ニ戒次ニ列ニ坐ス東西ニ。〕
 図B. 道場ノ圖



位地露